

# 北の大地で 風になる

北からの発信

まつり創造



はじめに

本年度の第十五回ツール・ド・北海道国際大会は、九月十二日から九月十八日の七日間にわたり道南 道央を中心に開催されました。

昭和六十二年に始まったツール・ド・北海道は、北海道の豊かな自然環境を生かし、サイクルスポーツを核とした活動を展開することにより、わが国、特に北海道における観光資源及び産業の開発、文化の振興、生活の向上、健康・体力の増進に貢献し、また、わが国におけるサイクルスポーツなどの普及・振興に貢献すること

を目的としています。

主催する財団法人ツール・ド・北海道協会は、この年の五月に、北海道開発庁、文部省、通商産業省三省庁の設立認可を受け、わが国で最初のステージレースを開催することになりました。これは、当時、輸出依存型の経済中心の社会に対する反省から、大自然とのふれあいを通じて都市化の過程で失った人間性の回復を目指すとともに、三年後にわが国で自転車競技の世界選手権大会が開催される予定であったため、この競技会の開催により、日本国内外に日本の自転

車競技を印象づけ、世界選手権の成功に資するという目的も背景にあったものと思われます。

当時、わが国においては本格的なステージレースは行われていませんでした。ちなみに第一回のジャパンカップが宇都宮で開催されたのは平成三年、第一回のツアー・オブ・ジャパンが開催されたのは平成八年です。

このように国内で前例のない大会を実施するため、第一回のツール・ド・北海道大会の競技プログラムは、一般規則に「初の」ステージレース「ゆえ、不慣れな面もありますが……」などと初めてのステージレースに対する不安が見え隠れした記述も見られ、試行錯誤を続けながら運営をしてきた様子が見えられます。

## 国際大会

国内の学生チームを中心にして始まった本大会は、札幌を中心とした道央、帯広、釧路、北見等の道東、稚内、旭川等の道北、函館からスタートした道南地方と、北海道各地で開催され、二巡目に入る第五回大会を記念して海外のチームを招請するなど、徐々に大会のレベルアップを図ってきました。

このように発展してきた本大会も、平成九年の第十一回大会からは、国際自転車競技連合(UCI)公認のステージレースとなり、アンチ・ドーピング検査を実施するなど、名実ともに国際大会と位置づけられ、さらに平成十二年からは一ランク上のクラスに格上げされています。

国際大会では、海外から五チーム以上の参加が義務づけられており、今年の大会にはイギリス、オランダ、カナダ、ドイツ、韓国のチームが参加しましたが、過去にはトルコ、ニュージーランド、アメリカも北海道の大地を疾走しています。





昭和山を背に走行する選手

ロードレース

自転車競技には、競輪場で行われるトラックレース、一般道路で行われるロードレース、オフロードを走るMTBなどがありますが、ロードレースはマウンテンにたとえられる長距離競技で、一ステージで二百キロメートル近く走り、それが数日間続く極めて過酷なレースです。

競技者は走りながら水や栄養補給をするため、自ら食料を持って走るとともに、レースの途中には飲料水や食料等の補給所を設けてあります。

また、自転車はアルミ製などで極めて軽くしており、変速ギアもフロント一段リア九段から一〇段もある高性能なものを使用しています。タイヤも幅十二ミリ程度と細いもので、レース途中でのパンク等のアクシデントは日常茶飯事であり、このためのサポートカーが、競技者の後方を追従しています。

さらにミセトル(審判)等もレース状況を監視するため選手団の前後を自動車やバイクで走っており、本ツール・ド・北海道国際大会では併せて約六〇台の車が百台の自転車をエスコートするような形でキャラバンを構成しています。

第十五ツール・ド・北海道国際大会

今回の大会は外国からの五チームを含む二〇チーム九九九人の選手が参加し、函館市でのプロローグを皮切りに、札幌市での第六ステージまで、大会史上最大の全長八一六キロメートルの区間で

競技開始までは台風十五号の影響

競技が行われました。

同時多発アリの影響等不安材料が多々ありましたが

競技開始後は天候も回復し、昨年の有珠山噴火で被害を受けた洞爺湖温泉や、東日本最大のつり橋である白鳥大橋も当初の予定どおり通過し、大勢の市民の声援を受けながら各選手が道南道央を疾走しました。



その結果、個人総合時間賞(個人総合)はアイランドのデヴィッド・マッキン選手が獲得し、国土交通大臣賞が授与されました。また、団体総合でもアイランドが二年ぶり三度目の優勝を飾りました。

また、全国から延べ六二〇人の一般市民が市民レースに参加し、爽やかな北海道の風を受け大いに北の大自然を満喫していました。

あとがき

今大会の開催期間中、海外チームから、来年もぜひ参加したい、今年参加していなかった海外チームからも、来年こそは呼んでほしいと参加を希望する多くの声寄せられました。

こつこつと内外の参加者の意欲と、大会運営に関わる各通過市町村の職員や一五〇〇名を超える多くのボランティアの方々の熱意に支えられながら、これからも回を重ねて参りたいと考えています。

財団法人ツール・ド・北海道協会

専務理事 阿部芳昭 記



日本人選手で今大会唯一の6thステージ優勝を果たした鈴木選手、肩車されている子供もご機嫌。



最強のアイランドチーム。写真中央 デヴィット・マッキン選手